

# 高校入試が変わった—悩む子ども・親・教師

小林 朗

## 一 中学教師の「あいさつ」

中学教師が顔を合わせると、必ず交わすあいさつがある。

「どう学校は落ちてきている？うちは今、大分いいかな」といった調子で言葉をかけ合う。大変な学校があると、「そりゃお気の毒にご愁傷様」と声のトーンを落とす。

これらのやりとりがあるように県内の中学校は荒れている学校が少なくない。

先日も教員同士の結婚式の二次会で、ある都市の中学校の話題が出た。しかし、学校にあることは臆気ながら話をするが、教師は自校の情報ははっきりと言え

ない。自校の状況は守秘義務があると教師は口が堅い。そのため、荒れた中学校の事例が教訓になり得ないのはここにネックがある。

本稿では、中学校の「荒れ」を論究するものではない。けれども、現在の「荒れ」が高校入試に一つの要因を孕んでいることは確実であろう。

## 二 高校入試が変わった

一九九八(平成一〇)年度に全国の高校中退者は二・六%になった。総数で十一万人を超えている。新潟県では一九九七(平成九)年度で、高校中退者が二・一七%となり、二千人以上を教えた。新潟市内では二つの高校が一年間で消滅してしまう規模である。

そして、その中途者の大半が高校一年生の早い時期に高校から去ってゆくことを高校教師に聞かされた時に胸を痛める。中学校の進路指導がきつとうまくいっていなかったと私は考えてしまう。

企業への要請により、高校入試のシステムがここ数年で変わった。企業は多国籍企業に通用する一部のスーパーエリートと、黙ってひたすら働く多数の労働者を養成したい。

一九九四(平成六)年度に理数科が登場した。スーパーエリートを具内に育成することを目的にしたものである。理数科ができた当時の当該高校の校長は、中学生を対象とした体験入学で、「亀と兎」の話を持ち出し、亀のように努力して最後は大学受験に勝利してほしいことを述べ、その大学例として「東京大学、京都大学、一橋大学など旧帝国大学と早稲田、慶応大学の有名な私立大学」をあげている。

一九九六(平成八)年度には全県の普通科推薦が始まった。教師から内申書に記述してもらうために生徒会役員や学級の係に立候補する中学生が増えた。「ポラントニア」の名のもとに教育活動が実施されてゆく。

この普通科推薦は中学校の評価方法を一変する。定

期テストだけで各教科の十段階評価を決めず、普段の授業態度や提出物を評価するというものである。「態度」を評価するのである。態度を評価することは、教師の言うことをよく聞く中学生が評価が上がるのは自明の理といえる。中学生は評価を上げるため、教師の前で「良い子」を演じる。

この評価方法が「隠れたカリキュラム」であることは明白である。中学生に対して、教師が評価を「脅かし」の材料にしていることは中学校では見え隠れしている。

その反動が高校に入學すると表面化してくる。

まず、女子生徒の変貌である。内申書が良いのは自然、おとなしい女子生徒が多い。新潟市内の進学高校は最近男子生徒より女子生徒の比率が高い。ところが、普通科推薦が始まった頃から、進学高校では成績がふるわない女子生徒が存在し始める。その上、中学校では成績が上位だった女子生徒が、高校の成績で下位に位置するためショックをうけて不登校や保健室登校になる場合が少なくなる。中学校の評価方法が、大学受験の点数主義に通用しないことがわかる。

第二は推薦制度そのものに後姿を見せる中学生であ

る。つまり、「良い子」を演じることができなかったり、嫌がったりして勉強から逃避する二つのタイプが生じる。一つは、塾などに行ってもものんびりしている中学生である。受験が真近になっても勉強はしない。不安だけが先行する。ただ、親だけが焦っている。親は自分の子どものもので納得いかない場合、名前を乗らないで学校に抗議してくる。なぜ、匿名かといえど名前を乗ると、自分の子が教師によって不利に扱われるからという理由である。親が必死になっている分に反比例して、本人は涼しい顔をしているのが少ない。

もう一つは、学校システムに反発し、本人が同じような仲間と「荒れる」現状を見せる中学生である。中学校の「荒れ」は、勉強ができない、わからないが一番大きな要因になっている。そのイライラが言動に反映してくる。

第三は普通科の推薦制度導入により、高校への合格者の時期がアンバランスになったため、中学校では進路指導が大変難しくなっている。一方では高校に合格して勉強などしない中学生、片方ではまだ高校入試をひかえて緊張し、不安に思っている中学生がいるとい

った状況である。中学校の卒業式を三年生全員でしっかりと迎えられないようになったのも普通科推薦制度が始まった時期と一致していることは偶然ではない。

第四は昨今、「十七歳」問題が社会を賑わしていることについてである。二十年前は中学二年生デビューといわれた。それが十年前には高校生デビューと注目された。まさに十七歳デビューである。これはもちろん発達が遅れていることも要因だが、中学校では「良い子」を演じ、おとなしい男子生徒に事件を起こすのが多いのが特徴である。あわせて、事件の加害者が中学生時代から友達がいなことが共通している。この問題も中学校の普通科推薦制度が始まって以来、内申書による評価に従順すぎる中学生が爆発する一つの要因といえるだろう。

さて、高校入試の規制緩和政策で今年度実施される「パーセント条項」がある。通学学区を緩和して、隣接学区からある全体の何パーセントかを入学させる。第三学区の新潟学区を例に見てみたい。

この学区は隣接学区の第一（新発田・村上）、第二（新津・五泉）、第四（三条・西蒲原）、第八（佐渡）から十五％入学許可できることになった。これは進学

校に生徒が集中することは当然の結果になるだろう。新潟学区からその入った人数分、他学区に流出する。

二〇〇〇年度の中学卒業生が六四七五人。進学率九八%と仮定すると、六三四五人が高校入試をうける。その十五%、九五二人が他学区へ追い出される。このことは、低学力の子どもがに新潟学区に残れない現実が起きることを示している。

新潟学区の高校に入学したい隣接学区の中学生は多いが、新潟学区から隣接学区の高校へ入学したいという子どもは少ないだろう。

夏休み中に行われた新潟中央高校の体験入学では、隣接学区から十六%の中学生が参加している。これを見れば、十五%の隣接学区からの新潟学区への入学は必至といえる。

ある新潟市内の中学生たちが、二年生の時にこのパーセント条項を学級担任から聞き、古町で署名でもなんでも集めるから、すぐにやめてほしいと学級の大多数の子どもたちが発言したそうである。中学生にとって、パーセント条項は大変、不安になる。

この点で重要なことは、新潟県の学区が全県一区になることが想像できることだろう。ますます高校入試

という受験競争が激しくなることは間違いない。

新潟県教育委員会は二〇〇七(平成十九)年度を目途にして、高校改革を完成しようとしている。中高一貫、総合学科や単位制高校の新設、職業学科の縮小、小規模高校廃校などをあげている。この高校改革が全国と比較して違うところは、「秘密主義」だということである。小出しにその改革案を県教育委員会は発表している。県民の反対を封じ込める目的といえるだろう。

今年度を見ても、新津高校の商業科、水原高校の被服科は今夏に体験入学を中学生向きに実施している。ところが、九月一日付けで県教育委員会は両高校の両学科を募集停止にした。中学生の希望や夢を考えていないやり方といえる。

少子化時代に、県民と対話しながら高校改革を実現していこうという姿勢が県教育委員会にはない。ただ形式として各地域ごとに「高校改革」の説明会を行ったが、フロアの質問を聞く県教育委員会ではなかった。高校入試システムの変更は中学生と保護者、地域を翻弄させている。

### 三 入試がうばう喜び

今年度の小・中学校の教員採用試験の論文題は、新潟県青少年問題協議会編「青少年の生活実態と意識の状況」の一九八九(平成元年)年から一九九九(平成十一年)までの調査結果をグラフにしたものを提示して、「教員としてどのように努力し、工夫したいと考えますか。あなたの経験等を踏まえて具体的に述べなさい」というものであった。

提示されたグラフは、小・中・高校別につくられ、大変興味深い資料である。このグラフ群が一九九五(平成七年)年が読めるようになっていた。新潟県で高校の普通科推薦が始まったのは一九九六(平成八年)年度である。それ以前と以後の中学生の意識の変化がわかる最適な資料なのである。

「学校生活に満足しているか」では、平成七年には中学生の七〇%が満足していると答えている。けれども平成十一年には十%もダウンして六〇%しか満足していると答えていない。満足の理由としては、「親しい友人がいる」という項目が中学生は圧倒的に多い。「勉強や授業が楽しい」は平成十一年で、九%強しかない。

「勉強や授業が分らない」は、平成七年には二九%だったのが、平成十一年には三五%に増えている。

また、「家庭学習を全くしない」では、平成七年に十六%だったものが平成十一年には二七%になっている。家庭学習をしない原因は、新潟学区で言えば受験産業に拍車がかかり、塾や家庭教師などを利用するため家庭で勉強しなくてもよいのだという意識が中学生と親御さんに固定概念としてあるといえる。受験産業へ中学生が通えば、保護者の皆さんは安心していられることがある。

昨今、新聞に受験産業の広告がない日はないくらいである。あわせて、誰から電話番号を聞くのか家庭教師や受験教材の売り込みが夜、中学生を持つ家庭に勧誘がある。この電話に大分、閉口している人も多い。

こういう社会状況の逆に、普通科推薦制導入後、勉強をしない中学生が増加している。もちろん、普通科推薦がすべての要因だとはいえない。しかし、勉強に對してあきらめが早くなったのは事実だといえるだろう。高校入試システムが複雑になればなるほど中学生の勉強への意欲を減退させる結果になっている。

この勉強に對する中学生の後向きの姿勢は、高校入試の抜本的な解決が必要である。高校進学を志望する

中学生には門戸をすべて開く高校入試の実現を指している。

一九九六(平成八)年度の普通科推薦制の開始は、かつて中学生を追い込み、受験を激化させる結果になっていた。

具体的に言えば、保護者の高校進学へのプレッシャーが子どもにかかる。テストで何点を取ったことでお金をあげたり、ものを購入するといった約束をする中学生を持つ家庭が少なくない。それに、中学生は普通科推薦制が内申書重視を知ると、「これ点数になりませんか?」「成績に関係しますか?」とすぐに教師に聞き返す。

今ほど新潟学区の中学生は点数主義が貫徹しているといえるだろう。ほんの一、二点の点数で中学生が一喜一憂しているのが現実である。

中学生の言動が高校入試によって歪曲している事實は中学校現場で枚挙に暇がない。

#### 四 十五の春

京都府の元嵯川知事は「十五の春は泣かせない」と発言したことはあまりにも有名である。それほど、中学生にとって高校入試は重荷になっていることは間違

いない。

大学入試を失敗した人を大学浪人と呼ぶが、高校入試を失敗した人を高校浪人と呼ばず、中学浪人と呼称するのも高校入試に対して社会的な冷たさが感じられる。

中学生はどの子も自分で勉強がわかりたいと思っている。自己実現ができるスポーツや行事等に熱心に参加したいと願っている。

ところが、新潟県教育委員会は中学生の実態を踏まえないでただ少子化を理由に、高校入試システムを変更する。中学生やその保護者を奔走させるだけである。中学生は自先の利益、点数をあげるために必死になり、人格そのものを破壊させてゆく。

中学生が本来持っている感性の豊かさや真理に対する真摯なまでの追求する姿勢は現在の新潟県内の中学生でもわれわれに実感させてくれる。学びの喜びを中学生に満喫できる保障がわれわれに問われている。

(こばやし あきら・新潟市中学校教員)

